

書 評

Felicity A. Nussbaum: *The Limits of the Human: Fictions of Anomaly, Race, and Gender in the Long Eighteenth Century*

Cambridge: Cambridge UP, 2003. xii+336 pp.

久野陽一

本書は、イギリスの国家アイデンティティの形成と平行して、性と人種の差異が近代的な形を取るに至った「長い18世紀」における「人間」というカテゴリーについて考察する。著者 Nussbaum は本書の巻頭で、特に文学作品における「異常なもの・人種・ジェンダー」の表象から、逆に、正常とされる人間の文化的意味も明らかになると述べる。彼女のいう「異常なもの」(anomaly)については多少の補足が必要だろう。この語は、時として「奇形」や「怪物性」などの同義語として使用され、身体的な障害だけでなく、常道から逸脱した様々なものを比喩的に含む。時代の標準的価値観が中産階級以上の白人の男性に帰されるとすると、そこから逸脱した様々な問題系、黒人など白人以外の人種、女性、男らしくない男性などの問題も本書では「異常なもの」と関連づけられ、それぞれ“abnormal”なものとして相互に絡み合いながら、時代の“norm”を批判的にあぶり出すのだ。そのため、たとえば Frank O’Gorman, *The Long Eighteenth Century: British Political and Social History 1688-1832* (London: Arnold, 1997) が「長い18世紀」を名誉革命から選挙法改正までと設定しているのに対して、本書の Nussbaum の場合は、1688年の *Oroonoko* の刊行から1833年の奴隷制度廃止までが「長い18世紀」である。

本書は必ずしも18世紀のイギリス国家論を前面に押し出して論じているわ

けではない。それでも、国家なるものが、本書で取り上げられる多岐にわたるテキスト群の背景に、時代を覆うある種の不安として確かに存在している。この点を端的に示す例が最初に取り上げられる。*Characteristics of Men, Manners, Opinions, Times* (1711)の中で Anthony Ashley Cooper, the third Earl of Shaftesbury は、当時流行の旅行記人気を批判した。彼によると、多数の読者(国民)が、古代のロマンスの現代版にすぎない旅行記の奇怪な物語に魅了されている事態は健全な近代国家にとって脅威的である。奇怪な怪物性が、男を軟弱にし、女性性を誤った方向に導くからである。そうした物語を好むことで、女性や男らしくない男 (effeminate man) の「奇形」が顕在化する。Shaftesbury にとって、*Othello* の Desdemona、このアフリカの物語に心奪われる女性とその代表例である。怪物に魅了されるような国家は、時には女性性を人種差別化して未開なもの結びつけ、国内から駆逐しようと試みる。18世紀を通じて繰り返し上演され最もポピュラーな Shakespeare 作品の一つであった *Othello* は、人種、ジェンダー、怪物的なもの、異人種間結婚などのテーマから、この時代の国家に取り憑いた不安と恐怖のオブセッションを反映したものとして、本書全体で何度も言及される作品である。後の時代になって、18世紀を代表するアフリカ系イギリス人の一人 Olaudah Equiano は、実際に白人の女性と結婚した。彼のような黒人の男性性は、魅力と嫌悪の両方を喚起し、ヨーロッパ白人の男性性(軟弱なやさ男、性欲過剰の放蕩者、社交的なジェントルマン経済人)に対するオルタナティブであった(第七章)。

18世紀後半、まだ絶対数はそれほどではなかったにしても、少しずつだが確実に多くの黒人奴隷が自由を手に入れ、イングランドにやって来た。そして、イングランドでは、1807年に奴隷貿易が停止、1833年に奴隷制度が廃止される。そこに至るまでの過程において、Shaftesburyの恐れた *Othello* の脅威はますます現実のものとなり、本書の問題系が同時に立ち上がる。その様子は、ペーパーバック版では表紙にも使われている “The Eccentric Duchess of Queensbury fencing with her protégé the Creole Soubise (otherwise ‘Mungo’)” (1773)と題する一枚のカリカチュアからも読み取れるだろう。この絵は、黒人のマスクを着けた Catherine Hyde, Third Duchess of Queensbury が、召使いの Julius

Soubise とフェンシングをしている場面を描いている。Soubise は、白人の父親と奴隷の母親の間に生まれ、1764年に10才でイングランドにやってきた。彼は、乗ってきた船の船長から公爵夫人への贈り物であった。この絵が描かれたころ、彼はフランス風のしゃれ者として有名で、数々の女性をものにしたという逸話が流布されていた。当時、絵の中の二人が愛人関係を噂されていたことから、フェンシングは性交渉（あるいは、性的対決）のメタファーに他ならない。しかも、絵の中では Soubise の刃の先が夫人の胸に突き当たっていて、彼の性的能力の高さを表している。また、Soubise には、スコットランド語起源で当時は黒人をいうのによく使われた “Mungo” という呼び名も付されていて、グレート・ブリテンの内なる野蛮人であるスコットランド人と結びつく。こうして、彼は、フランス人とスコットランド人、しゃれ者と未開人、黒人と貴族などの問題を体現する。また、このカリカチュアの黒人男性と白人女性という異人種カップルは、白人男性を中央にして対極にありながらも一致するものでもある。

本書は、「異常なもの」を論じた前半と「人種」に焦点を当てた後半に分けられるが、両者ともに「ジェンダー」の問題が重ねられる。イングランドが女性を通して人間なるものの境界線を引こうとしたときに、欠陥があり人種差別化された女性性の特徴についての考察が逆説的に活気づいた。そこでは、国家の健康と富に対する脅威でもあった天然痘が女性の外見に与える欠陥の問題（第四章）と、肌の色と女性性の問題（第五章）が交差する。Aphra Behn が同じ年に発表した二つの作品、*The Dumb Virgin* (1700) と *The Unfortunate Bride* (1700) は、どちらも文字通り障害を持ったヒロインが並はずれた知性を持つ物語である。彼女たちの特別な能力は奇形性に依存していて、当時の女性作家のおかれた苦境とパラレルな関係を結ぶとされる。同じことは、障害を持った男性についても当てはまる。Eliza Haywood は、1710年代から30年代にかけて人気のあった聾啞の占い師 Duncan Campbell についての本を二冊書いている。彼は、大衆の奇異への嗜好を利用して、自らを商品化し、ロンドンの観光スポットのようなものになった。Haywood の慈愛に満ちた視線は、常に見られる対象として女性化される Campbell の想像力と身体的障害を、女性作家の置

かれた立場に暗黙のうちに結びつけているとされる（第一章）。

一方、イギリスの男らしさ (manliness) が大陸風のやさ男 (macaronic fop) の対極であり、男らしさの欠如が国家の防衛にとっての脅威であるとする、Sarah Fielding, *David Simple* (1744) に登場するようなハイブリッドなジェンダー、すなわち、男っぽい女性や女性的な男性には、イングランドの外部という地理的特殊性が与えられ、人種差別的な含意をともなって、文明化の度合いを測るバロメーターとなる。ここで興味深いのは、未刊行の書簡を使って論じられる Elizabeth Montagu の Samuel Johnson 批判である。Montagu にとって、Johnson の洗練されていて装飾的な文体は“effeminate”な当世流行の趣味に合致する。しばしばラテン語的で荘厳だといわれる Johnson の文体は、Montagu にしてみると、弱々しい外国の特徴であって、国家のアイデンティティと安全を脅かすものでしかない(第二章)。Montagu を代表に、後に“Blue-stockings”と呼ばれることになる教養ある女性たちの「怪物的」な知性は、Richard Samuel の肖像画 “The Nine Living Muses of Great Britain” (1779) が示すように、国家の理想化された代表であると同時に、固定化された女性観からは逸脱したものと考えられた。要するに、彼女たちは“muses”であると同時に“Amazons”でもあった。価値をおかれると同時に奇形とも見なされたこうした“odd women”は、Laurence Sterne, *Tristram Shandy* (1759-67) の奇妙で欠陥を持った家族の男性登場人物たちと並置して論じられる。この小説において、すでにそれ以前のフィクションで馴染みのあるものとなっていた“effeminate”で洗練された男性性は、性的に不能で傷ついた男たちのそれへとシフトする（第三章）。

Othello と並んで、本書に通底する作品が Aphra Behn, *Oroonoko* (1688) である。ただしここでは、Behn オリジナルのノヴェラではなく、1695年の初演以来、18世紀を通じて人気をばくした Thomas Southerne による戯曲バージョンの方が問題となる。オリジナルではアフリカの黒人であったヒロイン Imoinda が、舞台上上がったとたんにヨーロッパの白人の娘に変更されたからだ。なぜ彼女は白人に変わったのか？ 物理的な理由は当時まだ黒人の俳優がいなかったからである。Oroonoko 役は白人男優が顔を黒塗りにして演じた。イギリスで

初めて黒人の役者が舞台上がるのは、19世紀になって Ira Aldridge のデビューまで待たなければならない(第八章)。John Hawkesworth によってさらに改変された *Oroonoko* のバージョン(1759)なども参照しつつ、様々なエディションに付けられた扉絵から、*Oroonoko* と *Imoinda* の図像の変化を論じた部分は、本書の最も重要な論点の一つを示す。未開な異国を思わせる様々なステレオタイプがでたらめに盛り込まれたイラストのうち、最後に取り上げられる 1825 年版では、*Imoinda* の肌の色が *Oroonoko* と同じくらいに黒い。奴隷貿易は禁止されたが、奴隷制度はまだ残っていたこの時期、Behn のオリジナルから一世紀以上をへて、円を一周したかのように再び彼女は黒くなる。Edmund Burke, *A Philosophical Inquiry into the Origin of Our Ideas of the Sublime and Beautiful* (1757)にある William Cheselden の引用によると、奇跡的に視力を回復した男の子が、初めて目にして最も恐れたのが黒人女性だという。黒人奴隷制度廃止運動の高まりとともに、肌の色の黒さがセンチメンタルな慈悲心を刺激した時代の中にあっても、黒さへの恐怖、特に性的にも人種的にも二重に差別される黒人女性に対する根元的な脅威がまだ根強く残っていたことがわかる。*Imoinda* が白人になっても不思議ではないのだ(第六章)。

ジェンダー研究だけでなく、人種差別問題や植民地主義研究の成果をふまえた本書の議論には、Nussbaum の編集によって同時期に出版された *The Global Eighteenth Century* (Baltimore: Johns Hopkins UP, 2003) 所収の諸論文とも結びついて、既存の文学史で規範とされる作品に限定された議論とは異なった視野の広がりがある。すると、次のステップとして必要なのは、本書では正面切って論じられていない周知の作品群、たとえば18世紀に恐怖を商品化したフィクションとして人気のあったゴシック小説などに関して、本書の議論を踏まえた上で再検討を加えることであろうか。Nussbaum と Laura Brown の編集した *The New Eighteenth Century: Theory, Politics, English Literature* (London: Methuen, 1987) のさらに新しいバージョンが期待される。